

オルガン要約 § 245～ § 252

§ 245 ここからはレメディーとその使い方、食事、使う時の注意について述べる。
レメディーとその使い方、使うときの注意について (§ 246～286)

§ 246 回復が順調に進んでいる時はレメディーを投与してはならない。慢性病はレメディー一粒によって時間をかけて(40日～100日)治癒が進むが、その時も投与してはならない。

しかしこういうことは非常にまれであり、患者や医者にとっては極めて迅速な治癒を達成することを希求しなければならない。そのためには以下のことが求められる。

- A) レメディーが極めて適切に選ばれること。
- B) ポーテンタイズされたレメディーを使うこと。
- C) 極微量で用いること。
- D) 適切な投与間隔を設けること。
- E) 投与するたびにポーテンシーを変えなければならない。なぜなら根源的生命力は最初のレメディーによって状態を変えているから。

(注) もしその必要があれば、十分に選ばれたレメディーなら毎日、数ヶ月でも使うことができる。低い希釈度から始めるので希釈度を高くしていくことができる。

§ 247 ポーテンシーを変えずに同じレメディーを一回以上反復して投与してはならない。それは治癒すべき症状以外のレメディーの症状を発症させてしまう。

同じポーテンシーのレメディーでは一回目と同じことはできない。同一の処方以前よりも重い状態にする可能性がある。

(注) 投与するたびにポーテンシーを変更すると障害は起きない。

適切なレメディーはより多くの違った仕方で投与されて初めて最もよく効力を発揮する。

§ 248 レメディーの飲み方:

- A) レメディーの溶液(注)は服用前に必ず 8～12 回容器を浸透させて活性化する。匂いを嗅いで服用するときも、8～10 回強く浸透すること。
- B) そこからスプーン 1 杯分服用させる。
- C) 急性の場合は一時間ごとに飲んでもよい。
- D) 慢性の場合でも数ヶ月間毎日飲むことも可能である。
- E) レメディーの溶液を使い切ったら、同じ溶液により高いポーテンシーのレメディーを 1 粒入れる。
- F) そうする間に一群の変化した症状の中で他の症状が現れたとき、ホメオパシー的に適した他のレメディーを変わりに選ばなければならない。その場合も A～E のやり

方を用いる。

完全に正しいレメディーを毎日反復していると、ホメオパシー的悪化(プルービング:レメディーの症状)が現れる。それをもって治癒が完了する時と考え、投与量を減らしていき、間隔も長くし、もはやこれ以上レメディーが必要でないと判断したなら、投与を中断する。そうすればレメディーの症状も消えていく。

(注)レメディーの溶液の作り方と飲み方:

- A)レメディー1粒を数粒の乳糖と一緒にしてすりつぶす。
- B)コップ7、8杯(1リットルくらい?)の水にレメディー1粒(A)を溶かす。
- C)そこから大さじ1杯の量をコップで8~10倍に薄める。
- D)強くかき混ぜる。
- E)そこから一定量(スプーン1杯?)を飲む。
- F)敏感な患者には第二、第三のコップを用意し、そこから小さじ一杯飲む。

§ 249 レメディー投与中に、初めて経験する激しい症状を呈した場合はレメディーが間違えている。アンチドートし、正しいレメディーを選びなおすこと。

激しくない症状ならアンチドートせずに正しいレメディーを投与する。

こういう時に「第一のレメディーの量が足りなかった」とか「ホメオパシーの理論が間違えていた」と考えてはいけない。単にレメディーが間違えているだけのことである。

§ 250 レメディー投与後に緊急的な事態になったなら、レメディーを間違えている。その時は「今の状態」に可能な限り完全にマッチするレメディーを与えなければならない。

§ 251 Ign.、Bry.、Rhus-t.、Bell.などのレメディーは症状に対して部分的に反対の症状を一次作用として生み出す。

厳密に選んだそれらのレメディーが全く反応しなければ、投与量を変えれば(もう一度投与すれば)効果が出るだろう。

§ 252 それでも回復しない場合は、病気を持続させる要因(Maintaining cause)が存在することを示しており、それを取り除くべきである。